

月刊

通巻

639

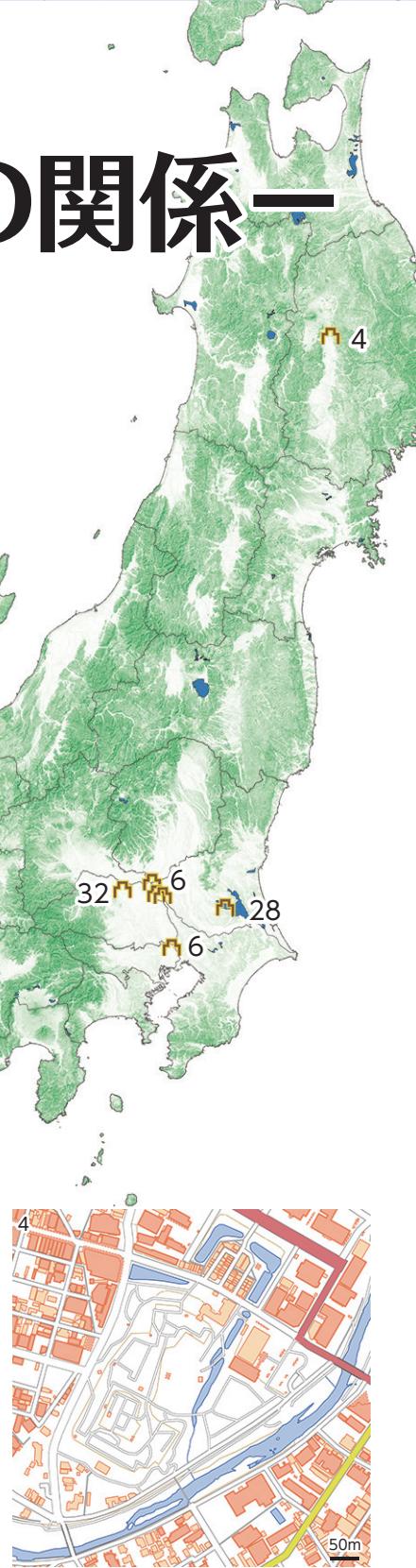
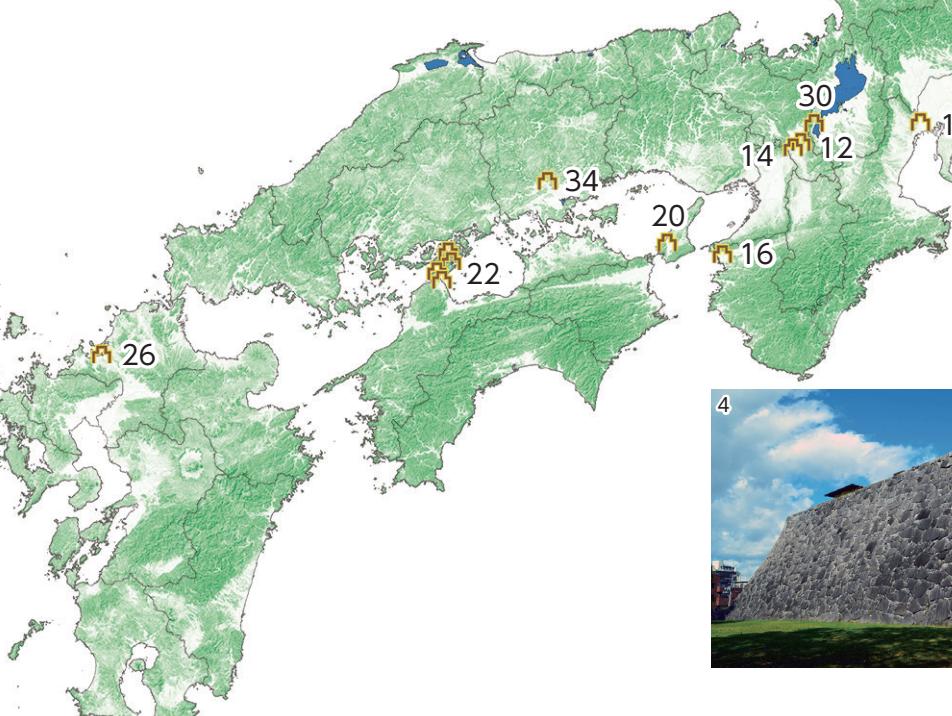
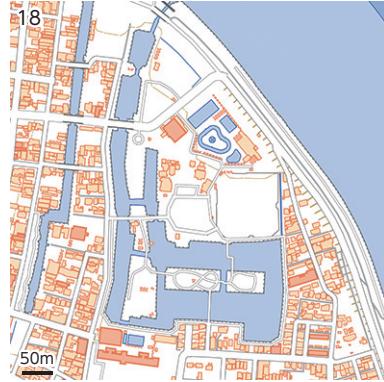
# 地図中心

2025年12月



地図と学ぶ

## 特集 津々浦々の城 —海・川・湖と城郭の関係—



津々浦々の城－海・川・湖と城郭の関係－ 序論

盛岡城・北上川と「水際の堅城」

低地に築かれた城－関東公方の城と葛西－

福井城・川と扇状地が作った堅城

伏見城

淀城

和歌山城～変化する堀の在り方～

桑名城・東海道の港が核となった町と城

志知城・知られざる淡路の海城

芸予諸島の海賊城と近代要塞

福岡城－入り江を利用した大堀と水堀、川で守られた城－

常陸木原城～霞ヶ浦を望む、大城郭～

「幻の城」坂本城

忍城水攻めはなぜ失敗したか

備中高松城～牙を剥く水環境～

坂井 尚登	3
神山 仁	4
谷口 榮	6
坂井 尚登	10
高田 徹	12
高田 徹	14
伊津見 孝明	16
遠藤 啓輔	18
坂井 尚登	20
坂井 尚登	22
田崎 茂	26
三船 智也	28
池田 晶一	30
近藤 徹	32
片岡 義秀	34

## 【連載】

『地図づくり最前線 029』ゼンリンが作った地図のトレーディングカード「Map Design GALLERY CARD/有人離島」	片岡 義明	36
『日本百名山が見える鉄道 見えた鉄道 25』水郡線・磐越西線・只見線から磐梯山	清水 長正	38
『歴史舞台地図追跡 99』江戸・東京をめぐる虚像と実像(其の世式)	谷口 榮	40
『地図を片手に大地を駆ける 93』世界最古の地図	村越 真	42
『ペクター地歴地図孤軍奮闘記 66』江戸落語地図 玖	小島 豊美	44
『地図心中 復活版 42』絵解き－39 緑のテーマパーク	高橋 美江	46
『地図四方山話 14』国土地理院のすべて・補遺－むかしこんなものもあった課 03	前野 政克	48
新刊地形図案内 50 / 今月新刊の見どころ！・日本地図センター便り 51 / 編集後記・次号予告	52	

## 月刊 地図中心

◆「地図中心」は毎月10日発行です◆

1冊 880円(税込)

## 地図俱楽部

◆紙版と電子版のご購読会員

年間購読1年間 12冊

プレミアム会員

6,600円(税・送料込)

プレミアム会員(シニア)満65歳以上

5,500円(税・送料込)

◆電子版のみのご購読会員(紙版は送付されません)

地図俱楽部会員	会費(税込)	入会資格
一般会員	5500円	なし
一般会員(シニア)	4400円	満65歳以上
学生会員	2200円	学生または18歳未満の方
地図俱楽部事務局	map-club@jmc.or.jp	03-3485-5417

《表紙》

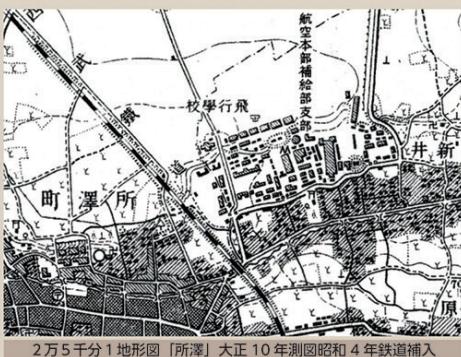
本特集で掲載している「城」の位置と、数字は該当ページを示しています。(地理院地図-陰影起伏図)

# 昔見たあの景色が、記憶の中で蘇る 旧版地形図データ 刊行開始！

国土地理院の「旧版地形図」のデータ提供・プリントサービスが、日本地図センターで開始されました。

明治期から現在に至るまでの貴重な地形図のデジタルデータが、容易に入手できるようになりました。

時代の変遷とともに移り変わる街並みや土地の様子を、ぜひご自身の目でお確かめください。



## 提供概要

▼対象地図：2万5千分1地形図(旧版)・5万分1地形図(旧版)  
★現在、紙地図で刊行中のものは除く

▼提供形式：デジタルデータ(TIFF形式)ダウンロード

プリントサービス ★データを購入された方が対象

▼ファイル容量：カラー(100MB～500MB程度)  
モノクロ(1MB～10MB程度)

▼解像度：600dpi又は400dpi

▼価格：1図葉610円(税込)

プリント出力880円(税込)

▼詳細はこちら

<https://net.jmc.or.jp/mapdata/oldeditionmap.html> >>>

## 多彩な用途

▼地域の歴史研究・調査資料  
▼教育・地域学習教材  
▼インテリアやギフト

▼景観の変化の新旧比較  
▼古地図コレクション

## ご購入方法

日本地図センターのオンラインショップ「地図センターネットショッピング」にて、お買い求めいただけます。

旧版地図データ 検索

## お問合せ先

一般財団法人日本地図センター 情報サービス部  
ネットサービス課 メール：net@jmc.or.jp



# 津々浦々の城 —海・川・湖と城郭の関係—序論

さかい ひさと  
坂井 尚登

## 1. 交通路としての水と城郭

タイトルの「津々浦々」という言葉だが、「津」は港、「浦」は浜辺を指し、それぞれ二つずつ重ねて全国の隅から隅までという意味になる。島国である我が国土を表現する象徴的な言葉である。現代のように整備された道路のほとんどなかった古代から中・近世にかけて、物流は舟運が主であった。水は国土を人体に例えれば血管を流れる血液のごとく、入江や河口に立地する海港、大きな湖のほとりの港、河川を遡った中・上流の河港まで舟を運んだ。港から先は、毛細血管のような陸路を通じて、人の背や駄馬、牛で山奥に至るまで荷物が運ばれた。物資の集散地である港には人々が住み着いて町ができ、通商や金融で成功して有徳人や長者と呼ばれる富裕者、水上交通を支配する海賊・湖族と呼ばれる集団も出現する。

戦国時代になると、港と町は敵

対勢力との争奪もしくは襲撃の対象となり、管理・守備のために城が築かれる。立地する地形は、三角州(坂本城・桑名城)、砂州(今治城・長浜城)、自然堤防(淀城・備中高松城、忍城)、河岸段丘(盛岡城)、海岸段丘(江戸城・大坂城)、丘陵(和歌山城・福岡城)、島嶼(能島城・来島城・甘崎城)、水辺に近い小山等さまざまである(付図参照)。前二者の場合は水面との比高がごく小さい微高地であるため、防御や洪水・高潮対策のため、土壠や石壠で曲輪を堤防状に囲む、曲輪面に盛土するなどの普請(土木工事)が必要だった。

## 2. 防御の手段としての水と城郭

水は防御にも有効で水堀としての役割を果たす。ただし、敵が船で攻めてきた場合は障害にならない。海、川の間に砂州や自然堤防でワンクッション隔てて水堀を掘る(今治城・岩槻城)、波食崖や段丘崖な

どに臨むなど占地を工夫した。それができない場合は、土壠・石壠などで人工的に障害を設ける必要がある。

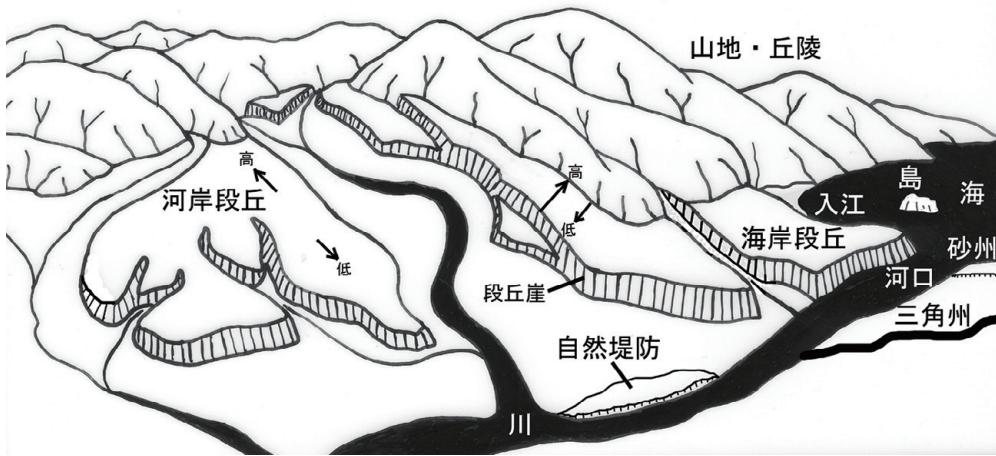
また、島嶼の城郭には水場が無い場合が多く、水軍力が優勢でなければ城を維持できなかった(来島城)。

## 3. 攻城の手段としての水と城郭

攻城の手段として「水攻め」がある。城の周囲に築堤することによって城の周囲を湛水、水没させてしまう攻城手段である。豊臣秀吉が得意としており、備中高松城攻め、紀伊太田城攻め、武蔵忍城攻めは日本三大水攻めと称される。

既存堤防の破壊は、城方の防御手段としても使われている。大坂冬の陣では、大坂方が淀川の太閤堤を切って徳川勢の接近を阻止、妨害しようとしている。

以下、城と水の深い関りについて、筆者の皆さんによる各論を御高覧願いたい。



付図 水辺の城 立地地形概念図  
熊木洋太・鈴木美和子・小原昇(1995) :技術者のための地形学入門. 山海社.  
P.88の図3.19「段丘・台地の模式図」を加筆改変して作成。

坂井 尚登



1959年新潟県三条市生まれ、茨城県下妻市在住。国土地理院で地形分類等に従事し、阿蘇山で高森溶岩流を発見。現在は地形・城郭研究家。古代山城、中・近世城郭、近代要塞、チャシ、グスクまで地形と城郭の関りを幅広く研究。大坂城真田丸を地理資料から「四角い」と明確に述べた論文を日本で一番最初に発表。日本城郭史学会評議員、日本地図学会会員、城郭談話会会員。



# 盛岡城・北上川と「水際の堅城」

かみやま ひとし  
神山 仁

## はじめに

盛岡城は「石垣造りの城郭」として知られるが、「水際城郭」という一面があることはあまり知られていない。洪水対策として、江戸時代初期のまちづくりプランのなかで河川は城から遠ざけられたからだ。盛岡の城とまちの歴史のなかで、そこに河川がいかに関わっていたのか、城と城下町の歴史を城下絵図と地図を用いてひもといてみよう。



盛岡城本丸腰曲輪の高石垣

## 盛岡城の前身、不来方城

盛岡城は盛岡藩主南部家 20 万石（当初は 10 万石）の居城であるが、武士も商人・職人・町民も、そして近郷近在の農民たちも、誰もが水に恵まれて生きていた。盛岡には今も名水と呼ばれる清水が多い。源泉は北上川の伏流水であるといわれる

が、その流路は古代から近世にかけてなんども洪水をくり返し、流れを変えてきた。盛岡城を築くときは最高の要害と称えられたが、治水工事は容易でなかったはずだ。

そこで地図①を見てほしい。南流する北上川が大きく蛇行したところに盛岡城の前身、淡路館・日戸館・慶善館が築かれているが、三館の総称を不來方城と呼んだ。本来の地名は越方と思われ、支流の中津川を越えたところという意味が感じられる。この地形に目を付けた武将が浅野長吉（後に長政）で、1591 年（天正 19）、豊臣政権に臣従していた南部信直に対し「この地に新しい居城を築くべし」と勧めたといわれる。

## 熾烈な水との戦い

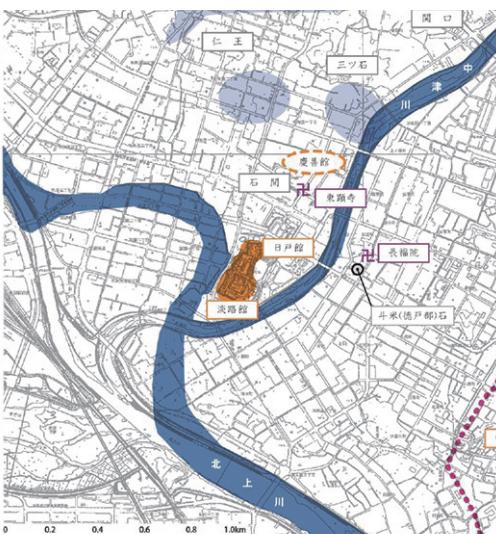
盛岡城の城普請は信直の嫡男、利直が総指揮を執ったとされる。父が肥前名護屋城に詰めていたときに地形普請（造成工事）を進め、1597 年（慶長 2）から石垣普請を始めたと想定される。信直を支える豊臣政権の手入れもあり、城の石垣普請を担う「穴太衆」を連れてくることができたと考えられる。盛岡城が豊臣大坂城に代表される織豊系城郭の特

徴を備えていることからもうなづけよう。しかし城普請は相次ぐ北上・中津川の洪水に阻まれ難航した。

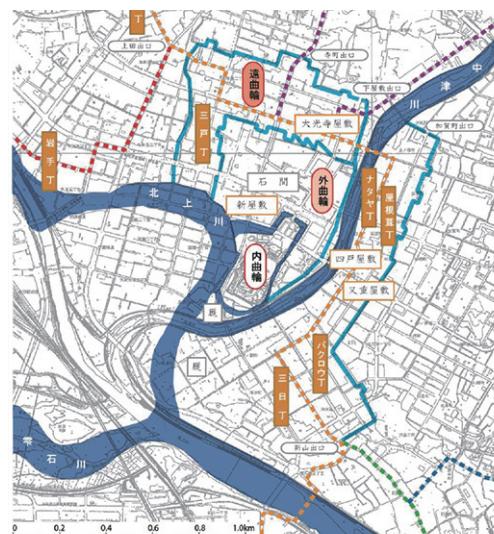
地図②を見てみよう。城が両河川の合流地点に位置していることが分かる。城の本丸には三重櫓が聳えていたが、その景観は、さながら浮城のように見えていたかも知れない。一方、図 1 に描かれるように、三ノ丸下段西北部と本丸腰曲輪下段西南部には舟入りが設けられていて、南部氏が積極的に北上川を利用していたことが見てとれる。また地図②を見ると、川を基軸に内堀・外堀・遠曲輪（惣構）の堀を巡らしているこ



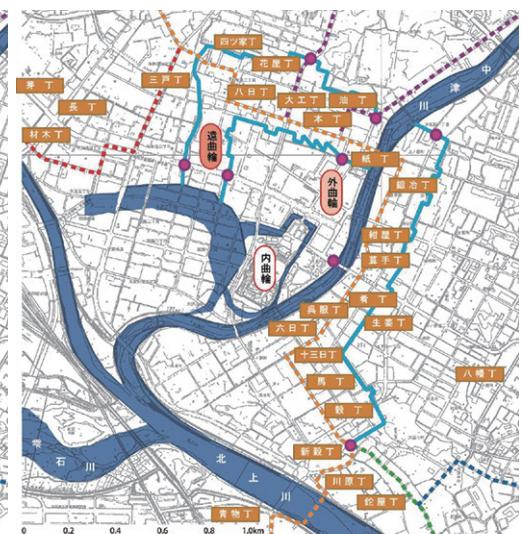
図 1 盛岡城の舟入り（部分）  
北上川を積極的に活用した「水際城郭 盛岡城」の性格を際立たせる存在  
正保城絵図「奥州之内南部領盛岡平城絵図」（国立公文書館内閣文庫蔵）



地図① 戦国時代後期の盛岡城付近（部分）



地図② 江戸時代初期の盛岡城と城下町（部分）



地図③ 江戸時代中期以降の盛岡城と城下町（部分）

地図①②③ 作図 盛岡市教育委員会、提供 盛岡市

とが分かる。堀の水は両河川から引いている印象を受けるが、そうではない。城の北側の堀は北山と称される丘陵地帯から流れ出る小河川の水を引き入れ、地図①に示される仁王や三ツ石付近の湿地・沼沢を干拓して水を抜き、堀に流し込むなど、湿潤な城下北方の水源を管理していたと考えられている。

### 北上川の流れを変える

地図③を見てみよう。北上川の蛇行部分が本流から切り離され、古川となった様子が分かる。本流は川幅を狭めて南へ流れている。この状態が今日の盛岡市街地の基礎となる。すなわち 1673 年(寛文 13) 5 月、南部家は江戸幕府に対し河川改修の実行を願い出て許可されている。そのとき幕府へ提出した盛岡城修復願絵図の写しが、東北大学附属図書館狩野文庫に残されている(「南部盛岡城図」)。同絵図によると、当初計画は図 2 に加筆したように、現在の

盛岡駅前通り「開運橋」付近から菜園通りを流れ下り、城地のすぐ下で旧北上川本流へ合流するようになっていたが、このプランは見直され、結局は地図③のように変更され、往時の盛岡市民は洪水の悩みから解放されることになった。

この川普請(治水工事)は、南部家がその財を傾けてまでおこなった、空前絶後の築堤普請といわれる。「開運橋」上流に本流を堰き止める仮堤防を築き、そこを基点に流れを変えるための新流路を掘り進め、杉土手付近で本流へ合流させたのである。川普請は順調に進んだようで、1673 年(寛文 13) 7 月に起工し、ほぼ 1 年後の 1674 年(延宝 2) 9 月に本堤防(新土手、後に新築地と呼称)が完成、古川口の留切りと新川の通水式がおこなわれた。この歴史的景観は、「開運橋」のたもとに立ってみると実感できる。

完成後は、中津川との旧合流点から新合流点へ向けて中津川「新川」

を通す川普請がおこなわれ、地図③に見るかたちが完成した。この状態が今日の盛岡市街地の基礎となる。下流には川湊「新山河岸」が整備され、川舟により石巻港と結ばれた。



「開運橋」の左方にみえる道が新土手の遺構  
ダイワロイネットホテル盛岡駅前の客室より  
眺望する「歴史的景観」

### おわりに

こうして北上川は城地から遠ざけられ、その跡は古川と呼ばれた。最大の防御、北上川を失った代わりに、南部家は古川に面する二ノ丸西壁に高さ約 14m、長さ約 200m の高石垣を築いた。それは南部信直・利直父子が始めた盛岡築城の総仕上げでもあった。完成は 1686 年(貞享 3) 3 月、時の城主は利直の五男・重信で、築城開始から百年になろうとしていた。みごとな石垣は完成したけれども、近代以降の都市開発で北上川が蛇行して流れていた痕跡と面影は薄れ、舟入りの遺構も完全に消滅した。いま、盛岡城跡公園(岩手公園)を訪れても水際城郭のイメージはまったく湧かない。せめて地図と城下絵図を頼りにまち歩きを楽しみ、川面に姿を映す盛岡城の姿に思いを馳せていただきたい。

### 神山 仁



1957 年 盛岡市生まれ。日本城郭史学会委員。江戸幕府の城郭統制政策について関連史料を調査している。『城郭修復図の研究』(戎光祥出版)



図 2 北上川の流路付け替え概念図(×0.6部分)  
「盛岡城下絵図」(元文間年)個人蔵

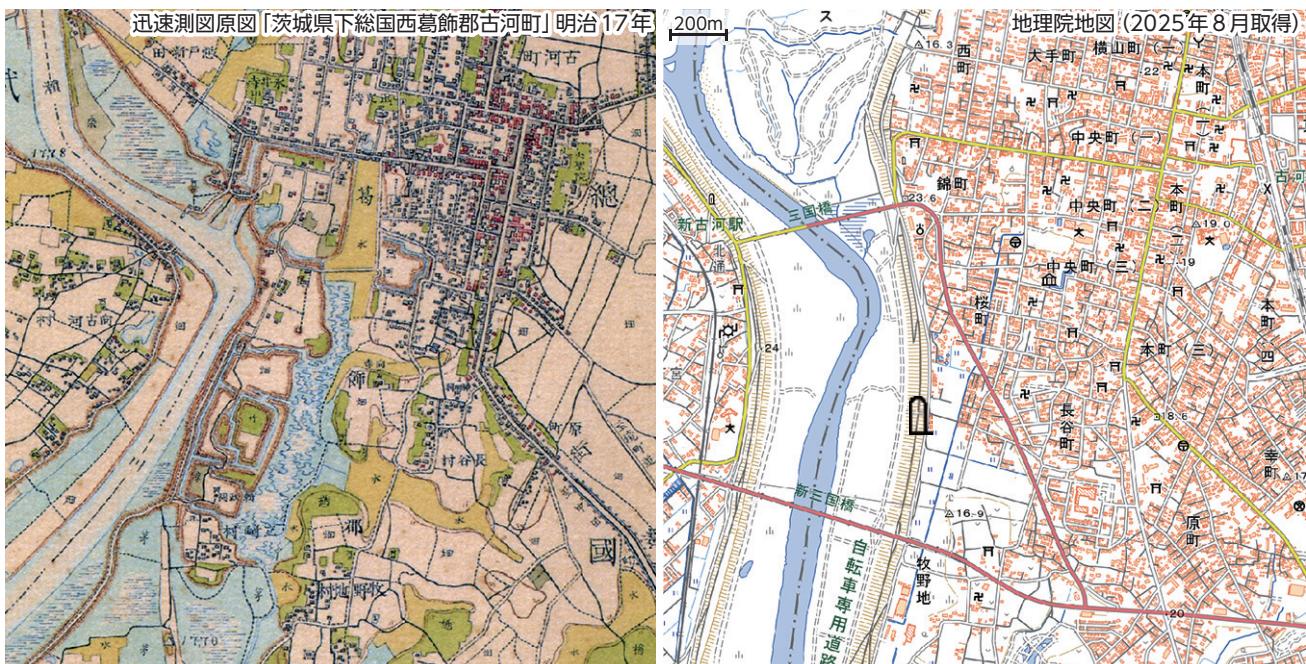
## 編集後記

江戸から明治へと時代が変わり、多くの城の建造物は、廃城令(1873[明治6]年)によって取り壊されます。6~9ページで取り上げている古河城(8ページ・図3)も例外ではありません。1884(明治17)年の迅速測図原図(下図)では、城

の曲輪に建物は見られず、「桑」や「畠」の注記があります。

これらの曲輪や堀も、明治末期からの渡良瀬川の河川改修事業によって姿を消し、今は土手に「古河城本丸跡」の碑がポツンとたたずんでいます。

(編集長・小林政能)



## 次号予告 2026年1月 通巻640号

毎月10日発行

地図と学ぶ月刊

## 地図中心 総特集 本州四国連絡橋偏愛マップ

世界最大級の吊橋「明石海峡大橋」をはじめとする長大橋梁群、3つのルートで本州と四国を結ぶ「本州四国連絡橋」。風光明媚な瀬戸内海を跨ぐ巨大インフラの誕生は、地域社会の日常をどのように変えたのでしょうか。建設の歴史と背景、地図で見る今昔の景観変化、最新の維持管理技術の紹介まで、多様な日本の大動脈の姿に迫ります。



バックナンバーのご案内

地図中心

検索

「地図俱楽部」へのご入会をお待ちしています! 03-3485-5417(事務局)

## 地図中心 2025-12 通巻639号

発行 2025年12月10日  
発行所 一般財団法人日本地図センター  
〒153-8522  
東京都目黒区青葉台4-9-6  
電話 03-3485-8125  
FAX 03-3485-5593  
(月刊「地図中心」編集室)  
メール chushin@jmc.or.jp  
URL https://www.jmc.or.jp  
©一般財団法人日本地図センター  
定価 880円(税込)  
印刷所 昭栄印刷株式会社

地図と学ぶ月刊誌



本誌の一部あるいは全部を無断で複写・複製・転載することは、法律で認められた場合を除き、禁じられています。

雑誌 86689-12



4910866891253  
00800